シリーズ
先生紹介
第3回

今回の教官紹介は、商学科の山本眞樹夫教官です。現在 学術担当の副学長として、独立行政法人化や大学改革などに取り組んでおられます。小樽商大出身者ならではのお話しを、同じく小樽商大出身の大沼宏教官がインタビューしています。

「会計意味論が難解といわれていても、実は非常に身近だと思います」

山本 眞樹夫（やまもと まきお） 副学長

〈商学科会計学講座財務会計論／教授〉

●1972年 3月　小樽商科大学商学部卒
●1990年10月　同上　教授
●2002年 4月　同上　学術担当副学長
●1992年 5月　経済学博士

学生時代

大沼（以下O）：本日はインタビューに応じていただきまして有難うございます。先生はずっと小樽で……？

山本（以下Y）：生まれは新潟市です。3歳か4歳のとき親父の仕事の都合でこっちに。南小樽のほうでした。それで量徳小学校、住吉中学、潮陵高校へ。

O：そして小樽商大に入られたわけですが、「これをやりたい」というのはあったんですか？

Y：特になかった。ただ理系志望だったので管理科学科(現在の社会情報学科)に行こうと。

O：学部の頃は理科系でらしたんですね。どういうことをやっておられたんですか？

Y：管理科学科では学科固有の勉強としてプログラミング言語とかを勉強しました。当時習ったのはAlgolとか、CobolとかFortranとか…。Basicじゃなかった（笑）。

O：以前に山本先生のHPを見た人が「これは相当(プログラム)言語に通じている人じゃないか」って言ってるのを聞いたことがあります。「HP作成ソフトじゃなくて、自分で書いてるだろうな」と。

Y：そうそう自分で。エディタ使ってやってる。

O：なるほど。じゃぁ当時 勉強されたのが、今も関係してるんですね。

Y：うん。でも、あんまり合わなかった(笑)。当時は学科固有の科目以外に、簿記・原論・統計といった商学の勉強も必修だった。それで学部2年のとき簿記を受けて、「あ、これは肌に合いそうだな」、「簿記・会計を勉強したいな」と。ただ管理科学科には、簿記・会計のゼミはなかったので、それに近いだろうと藤田芳夫先生のゼミ(機械化会計)に入った。僕が3年のときにその先生が転出されたんだけど、残された学生を預かってくれたのが古瀬大六先生。「柳沢教授」のモデル。

O：ほんとですか！ マンガでは「柳沢教授」は経済学の先生ですよね。古瀬先生は？

Y：数学的な経済学でしょうね。ゼミでは数学的なリニア・プログラミングとか、待ち行列とか、そういうことも勉強させられました。でも、合わなかった(笑)。

大学院時代～会計学との出会い

O：大学院は久野光朗先生のゼミに行かれたんですね。

Y：財務会計と簿記を勉強しました。当初は、特に「研究者になる」という強い意志を持ってたわけじゃないけど、勉強をやっているうちに面白くなって、研究者も面白いかなと。

O：当時の専攻・研究テーマは？

Y：資本会計論です。「資本」というのは極めて抽象的な概念です、会計で言えば資産と負債の「差額」。「資本」には何の実態もないけど、「資本」主義というくらいですから、これが世の中を動かしている。つまり、実体のないものが世の中を動かしている。―― そこに関心を持ちました。

O：博士課程は東北大で、会計意味論の権威の杉本先生に指導を仰がれたんですよね。そこで資本会計と意味論を結び付けられたんですね。会計意味論とはどんな学問なんですか？

Y：「会計」は企業の実体を映し出すんですが、企業の全部を映し出すわけではなく、実はその一部を映し出しているんです。ですから、「会計」が分かったからといって、企業が全部分かるわけではない。企業のどういうところを映し出しているのか。映し出した結果、資本・収益・費用・資産などの概念がどういうふうに生まれてきて、操作されているのか。―― そういう人の作り出した実体のないもの(概念)が、世の中を大きく動かしているが、それはどういう現象かということをみるものです。例えばイスが100円である、というのは会計固有のマッピングだけれども。そのイスは、この部屋にあれば「備品」で、事務機器屋にあれば「商品」。さらに事務機器屋によって値段も違う。この部屋にあっても減価償却してくるし…。つまり同じものでも どうマッピングするかは、経営的な側面が大きいと言えます。

O：だからこそ会計情報を読み取る場合には、作成者・経営者の意図っていうものを踏まえなければ正確な理解はできない。意味論的な発想にたった分類が重要だということですね。

Y：おそらくそれでないと説明できないんじゃないかな。(会計意味論が)難解といわれていても、そういったことからすると、実は非常に身近だと思います。―― 客観的な分類も必要だろうけど、本当に役に立つ経営情報・会計情報であるためには、これから段々そういうところも必要になってくるんじゃないかな、という気がしています。

商大生について

O：最後に 現在の商大生についてですが、先生の頃と比べるとどう感じられますか？

Y：自分を表現することがまだ下手だよね。論理的に表現するとかいうのがまだ下手な気がするよね。我々の時代も確かに下手だったけれども、カッコつけに難しい本を持ったりとか、難しい議論を吹っかけたりとか、そういうのはあったもん。

O：なんかどうでもいいことで議論したり(笑)。

Y：そうそう(笑)。だから久野ゼミで7時頃に終わって飲みに行っても続いてた、議論が。今は、「ゼミ終わったんだから、酒を飲む場でそんな議論をするのは野暮だよ」みたいなところがあるじゃないですか。それに、共通の言語っていうのがないというか、仲間内で2・3人の間でだけで通用する言語でしゃべってる気がするなぁ。

O：ちょっと寂しい感じもしますね。お忙しいところ、本日はどうも有難うございました。